様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４６５

研究課題名（和文）社会葛藤と言語行動

研究課題名（英文）Social Conflict and Linguistic Behaviour

研究代表者
ＧＵＬＢＥＹＡＺ　Ａｂｄｕ（Guelbeyaz, Abdurrahman）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・准教授

研究者番号：９０５９８４２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会的葛藤状況と、そこに関与する社会集団の言語における変容過程との関係性を、記号論的変化理論を中心に据えた多理論的枠組に基づいて調査・分析した。社会的に意味を有する記号論システムにおける変容仮定が、概して社会変動に、とりわけ社会的葛藤にどのように関連するかを、限られた数の明確な実例を基礎として検証及して資料化を行った。その中で、社会葛藤モーメントに対応する規則的且つ多発的言語変化パターンを明らかにし、記述及び体系的な分類を行った。研究の過程では、理論的枠組みの中核として発展させられた記号論的変化理論を基に、社会的葛藤の主要な理論モデルとその根底に潜む中核的概念の批評を行った。

研究成果の概要（英文）：In this research, based on a multi-theoretical framework the central component of which was a theory of semiotic transformations, the nature of the relationship between social conflict situations and transformations in the languages of the social groups involved was inquired into and analyzed. On the basis of a limited number of examples, the research uncovered and described patterns of linguistic change corresponding to moments of social conflict situations. Within the course of the research a theory of semiotic transformations as the central component of the theoretical framework of the research was developed, on the basis of which a critique of major theoretical models of social conflicts and the underlying central concepts was undertaken.

研究分野：社会言語学

キーワード：semiotics　social conflict　conflict studies　conflict management　language contact　language change

１．研究開始当初の背景
本研究は、下記の洞察に触発されて創始された。
ソビエト崩壊後の二十年間は、いくつもの集団を巻き込んだ紛争が、異なる社会的集団／編成モデル間の社会政治的敵対によるものではないという明白で冷静な認識を、われわれにもたらした。広範囲に及ぶ暴力的な社会紛争が世界中で発生し激化している。植民地主義によって蹂躙され、貧困に苦しんでいる地域においてだけではなく、「西側」諸国においても、終わりのない破壊の乱行が生じている。デジタル革命の開始以来、世界は劇的に変化した。そしてこの傾向が日々強まっていることは間違いない。距離は縮まり、近年では完全に解消したかのようである。今日のデジタル社会における行為者が、まもなく質的に全く異なる物理的基準に照らし合わせてて、思考し行動するようになると予想することすらも無謀ではないように思われる。デジタル化された日常は、物理的な不在や距離を次の警句に置き換えてしまった。「地理的な孤立は、今や不思議なおとぎ話の現実離れしたミゼンサーヌである」と。人は個人としても集団としても、現実的にもバーチャル的にも、ますます移動性が高まっている。世界にはもっと別のよりよい場所があり、それが石を投げれば届くくらい近くにあるのだ―という認識は、とりわけ、まず差別や弾圧、不利益を受け、搾取され、虐待されている人を突き動かしている。これらの人々が、特権を享受している「受け入れ国」の住民に花束を持って歓迎されないということは、現代社会においてよくある日常の光景となっている。紛争を引き起こす地球規模の断層線は、例えば資本主義的生産様式と事実上というよりは名目上の社会主義的生産様式の間や、「西欧的民主主義的」な統治・行政様式と「社会主義的自治様式」の間を走っているのではない、といった見解は、西欧の知的産業の主導的アクターたちに、事後的な事実として押し付けられた。

２．研究の目的
本研究の主な目的は、社会的葛藤状況と、そこに関与する社会集団の言語における変容過程との関係性を、記号論的変化理論を中心に据えた多理論的枠組に基づいて調査・分析することであった。
本研究では、社会的に意味を有する記号論システムにおける変容仮定が、概して社会変動に、とりわけ社会的葛藤にどのように関連するかを、限られた数の明確な実例を基礎として検証及び資料化を行う。その中で、社会葛藤モーメントに対応する規則的且つ多発的言語変化パターンを明らかにし、記述及び体系的な分類を行うことを目標とした。
本研究の二次的な目的は、初期の段階で行われた研究に基づいて、早期警報システムのようなものとして使用することが出来、進行中の社会葛藤に能率的に介入、そして持続可能な紛争後処理（post conflict treatment）を可能にする実践指向の「紛争解読（conflict reading)」を展開することであった。

３．研究の方法
まず記号論的変化の理論モデルが、研究の理論的枠組みの中心構成要素として、発展させられた。この記号論的モジュラが、社会言語学・歴史学的・心理学的な他の理論的モジュラに補われた。社会的紛争に関する重大な理論モデルと、その根底に潜む中核的概念が批評された。
紛争状況及びそれと同時に起こる言語学的変化と言語間の頻繁な接触が見られる特定の地域における事象、日常言語の被包化、そしてそこに関わるバイリンガル及びマルチリンガル状況を調査・記録された。
第一に、関連する社会学・人類学の資料として、トルコとドイツにおけるクルド語・トルコ語間の接触及び衝突に関わるものを収集、精査し記録された。
トルコ語・ギリシア語間と同時にアルバニア語・ギリシア語間の接触及び衝突に関わる有意義な社会学的・人類学的資料を収集、調査、記録された。
日本語・韓国語間、及び日本語・中国語間に見られる歴史的接触と衝突を考察した上で、他の実証的発見と並置・比較を行う。
研究の初段階において発展させた理論的枠組みに基づいて、収集された資料の考察・評価を行われた。

４．研究成果
本研究の結果の中心的構成最重要項目は下記のようである。
長期にわたる社会的対立は、言語的な対立と見なすことができるのではないだろうか。もしくは、たとえ言語的な性質が明白でないとしても、その対立が形成され発展していくどの段階においても、言語的にコード化されていくのではないだろうか。単に可能性としての対立であろうが、表面化せずに埋もれ、潜伏していようが、派生的存在であろうが、紛れもない事実として存在しようが、勃発した矢先であろうが、現在進行中であろうが、中断されていようが、終結・調停・解決されていようが―この対立は、対立の関与者・被害者である社会集団や共同体の日常使用言語に、体系的な精度と過剰なほどのディテールをもって刻み込まれていくのである。社会的対立が、その対立に関与するすべての人々、またはその対立の影響を被るすべての人々の使用言語に切り込んでくるという現象は、たまたま生じた何らかの社会的影響力のある出来事や事件が残した単なる痕跡ではなく、葛藤の発生と展開そのものなのである。別の言葉で手短かにいえば、個人の、または社会の破壊行為または殺害行為を、この行為と関連した言語使用と切り離して捉えるこ

となど決してできないのである。それどころか、言語行為は、人間に固有の行為すべてにおける―つまり、あらゆる破壊行為における―主要な構成要素なのであるばかりでなく、同時に、破壊プロセスのどの段階においても、その都度必要とされる量の殺害エネルギーを、人間の行為をなす細胞や組織へと送りこむ必要不可欠な供給網としてはたらいているのである。行為が遂行されている時やその後のみならず、前閾、つまり本題以前から、意図した行為が実際に遂行される前から、言語は、養分を補給する媒体としてはたらいているのであり、その媒体内で行為は企まれ、孵化するのである。言語は一方で、前閾で作用し、行為を企画・形成し、その構想を支えている。つまり言語は、行為が遂行される前から、その予備的な交渉・折衝を担っている。他方で、前閾的な言語行為は、意図したものの目的論的な課題を、つまり、世界に行為がどう作用すべきなのか、覇権と苦しみの織りなすグローバルなネットワークまたはその亜空間でどう作用することを意図しているのか、そしてどう作用すべきなのかを、最も初期の段階から前もって形成するのであり、同時にそのことから、意図された行為の実行可能性を事前に検証するのである。

具体的に表現すれば、例えば「アルバニア風ケーキの作り方は？まず初めに、卵を二つ盗んでくる。」というような一連の言語的産物の発案者、消費者、すべての能動的・受動的参加者は、アルバニアからギリシャへの労働移民の始まった一九九〇年頃から、数多くのアルバニア出身者を殺害した加害者または少なくとも共犯者なのである。この二つの契機は有機的に繋がっており、同じ一つの行いの必要不可欠な二つの段階を構成しているのだ。同様に、トルコの社会に属するすべての人々には、「見習いの馬蹄職人も、クルド人のロバの蹄なら親方になれる。」「クルド語は言語ではない、なぜなら単語数がたったの三百個だから。」などの言語的所産の能動的あるいは受動的な生産・消費に参加するか、または拒否するか、選択することができるのだ。この日常的言語の範疇で下される決断は、同時に、今となっては既に百年を超えるクルド人に対する破壊の乱行に参加するか否か、あるいは参加したいのか否かを表明するものなのである。

ヨーロッパでは―中でもドイツ語圏では―社会的な場は、異なったパラメータを持つ同様の基本的構造を成している。そこでは、死を招く欲望の主たる対象は別のものであり、対応する生産セクターは、巧みな言語的抹殺の産物の豊富さにおいて際立っている。「トルコ人女性は大学で何を？掃除のおばさん。」「どんな時ならトルコ人女性にツバを吐いても良い？ヒゲが燃えている時。」などの産物の能動的生産あるいは受動的消費をすすんで受け入れようが嫌々ながら参加しようが、抹殺に参加することを決断したという事実には違いはない。繰り返すが、これらの言語行為が、つまり「ただの言葉」遊びが、行為を構成する有機的成分であり、破壊行為を根本的・本質的に支える構成要素であることは指摘しておくべきだろう。

このような個々の例すべてを挙げようとすれば、全体ではとてつもなく大きな数になってしまうだろう。もちろん何らかの形で世界中の例を人口統計学上のパラメータを使って比較検討することも可能ではあろうが。すべての発話参加者、つまり思考する能力と言語を使用する能力を持って生まれたすべての地球の住人は、グローバルな破壊連続体が存在する各々に与えられた社会的時空間の中で、能動的あるいは受動的に殺害行為に加わるか、それとも拒絶・抵抗するか、日々新たに決断を下さなければならない。行為に参加するという決断は、その当たり障りのない単純な性質から今日まで大部分の支持を得ている方向性であることは明らかだ。その決断は、時代の思潮を受け入れ、一万年に渡って慣れ親しんできた人間文明の営みに参加し、その流れに身を任せることであり、リラックス効果をもたらし、解放感さえ与えるだろう。しかし、例外的に破壊行為への参加を拒絶するという決断を下すならば、その決断は、他でもなく言語使用の次元で始められなければならない。

人間あるいは社会現象を、言語現象から隔絶して考えることは不可能である。言語は、社会的個人の創造過程そのものであり、人間錬金術における賢者の石、あるいは人間的な要素を解体し、社会という溶液の成立を可能にする万物溶化液である。さらに、人間に特有の存在形態の物質的なありかたを決定する原初的裂け目の詰め物である。そして、プラトンの洞窟の住人であり、記号世界の捕虜である人間をとりまく耐えがたき距離と間接性を耐えられるものにする遠隔通信体系である。アブラハム系宗教の創世記も含め、人間の知性によって発想され得た全ての天地創造の物語は、純粋な言語行為で始まる。人類の出現と、人間が人間になる・社会化する過程の象徴であるアダムの物語の中で、人間性と人間化の表れとして登場する唯一の行為は「命名」である。最初の命名という行為によって、人間が人間になるという冒険が始まったのである。

人間が社会化していく過程の性質であり、そして得られた社会性を継続するためのたった一つの保証である言語は、全ての人間行為と活動の本質である。これはある行為に関しては即座に現れるが、ある行為に関しては、この言語的本性が目に見えるような状態になるのに一種の工程が必要になる。この工程は、「観点の転換」、「代替の読解法」、またはある種の「翻訳」、さらに正しい「再翻訳」等の形式を取るという前提を置く必要があると私は考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①ギュルベヤズ・アブドゥルラッハマン、「Sprache und Sozialkonflikt: Eine Neukartierung des Sozialen / 社会的葛藤と言語行為―人間性の再マッピング」言語と人間性―コンフリクト社会に見る言語行為と多言語, 松本工房, 352pp.

〔学会発表〕（計４件）
①ギュルベヤズ・アブドゥルラッハマン、「社会葛藤と言語行為 ―「バベル塔の話」の再読― （原題: Sozialer Konflikt und Sprachverhalten: Eine Neulekture der Erzählung vom Turmbau zu Babel）」International Symposium, “Language and the Human Condition: Social Conflict and Linguistic Behaviour - The European Treatment of ‘Kurds’-”, 大阪, 2014/11/2.（国際学会）

②ギュルベヤズ・アブドゥルラッハマン、「Foretokens and Vestiges of Protracted Social Conflict Situations in the Early 20th Century Turkish Literature」The 4th Asian Literature and Librarianship. 大阪, 2014/4/3-6. （国際学会）

③ギュルベヤズ・アブドゥルラッハマン、「Social Conflict and Linguistic Behaviour: “Conflict Reading”. Language and Super-diversity」Language and Super-diversity. Explorations and Interrogations. University of Jyväskylä, ユヴァスキュラ-フィンランド, 2013/5-7.（国際学会）

④ギュルベヤズ・アブドゥルラッハマン、「Meditations on Culture and other Euphemisms: An Attempt at ‘Deculturing’ the Meaning.」International Conference “Economic Crisis and Racism in Europe”, マケドニア大学, テッサロニキ-ギリシャ. 2012/8/31-9/2. （国際学会）

〔図書〕（計１件）
①ギュルベヤズ・アブドゥルラッハマン、他、「言語と人間性コンフリクト社会に見る言語行為と多言語」アブドゥルラツハマン・ギユルベヤズ（責任編集）、発行所：松本工房、大阪、ISBN978-4-944055-7I-5

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
ギュルベヤズ・アブドゥルラッハマン（GUELBEYAZ, Abdurrahman ）
大阪大学大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：90598426

(2)研究分担者
大澤　孝（OSAWA, Takashi）
大阪大学大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：20263345

(3)連携研究者
（なし）

研究者番号：